多賀城市文化財調査報告書 第20集

年　報　3

昭和63年度

平成元年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

序

当埋蔵文化財調査センターは皆様のおかげをもちまして開設２年目を迎えました。今年度は発掘調査及び関連の事業等昨年以上にあわただしい一年でした。周囲の目まぐるしい情勢の中、私共の今後の方向性について、各方面から注目を浴びた年でもありました。

さて、近年増加の一途をたどる宅地開発に伴なって、今年度は９件の発掘調査を実施致しました。新田遺跡第７・８・10次調査は寿福寺地区において継続調査として実施し、次第に奈良平安時代の陸奥国府周辺の様子や鎌倉・室町時代における武士の館の様子が明らかになりつつあります。また、第９次調査では古墳時代の土器150個以上が完全な形のまま集中して出土し話題を呼び、現地説明会には県内から約200名の見学者が集まる程の大盛況を博しました。山王遺跡においては第８次調査で幅12mを計る古代の道路跡を発見し、当時の都市計画の一端をしのばせました。高崎遺跡では、中央公園計画のため削除されることになった丘陵部分の調査を行ない、古代の建物跡や近世の屋敷跡を発見し、昭和55年に発見されていた合口甕棺を取り上げて復元し、展示ケースを製作しました。小範囲の調査ではありましたが橋本囲貝塚では良好な貝層の広がりを確認し、縄文時代の資料が手薄な当市にとって貴重な資料を得ることができました。

また、一方では当センターの第２回企画展「柏木遺跡」を開催し、遺跡のもつ重要性を広く世間に訴えました。現在、同遺跡を現状保存すべく国へ働きかけを行なっているところです。また第15回古代城柵官衙遺跡検討会では事務局として会を運営するという大任を果たしました。

このように今年度は関係各位のご指導ご協力により、所期の目的を達成することができました。来年度は今年度にも増して厳しい情況が予測されますが、微力ながら一層努力を続けていく所存です。

平成元年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長　名取恒郎

例　　言

1．本書は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが昭和63年度に行なった埋蔵文化財の調査報告と各種事業について概略的にまとめたものである。

2．埋蔵文化財の調査報告については、一般開発行為に係る橋本囲貝塚、新田遺跡、山王遺跡の成果を収録した。

3．本書中の土層の土色については、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄：1976）を使用した。

4．調査、整理に関する諸記録及び出土遺物は多賀城市埋蔵文化財調査センターが一括保存している。

5．発掘調査及び本書の作成にあたっては、下記の方々からご指導、ご協力を頂いた。

大石直正（東北学院大学）、入間田宣夫（東北大学）、須藤隆（東北大学）、後藤勝彦（仙台西高等学校）、藤沼邦彦・山田晃弘・中村紀子（東北歴史資料館）、白鳥良一・丹羽茂（宮城県多賀城跡調査研究所）、田中則和（仙台市博物館）

6．本書の執筆、編集は担当職員が分担して行ない、佐藤悦子、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田容子、菊池豊がそれを援助した。

本 文 目 次

序　文

例　言

Ⅰ．調 査 報 告 …… 1

1．橋本囲貝塚（試掘）……2　　2．新田遺跡（第７次）……5

3．新田遺跡（第８次）……8　　4．新田遺跡（第９次）……10

5．山王遺跡（第７次）……14　　6．山王遺跡（第８次）……17

7．山王遺跡（試掘）……20

Ⅱ．事 業 報 告 …… 21

1．展　　示 …… 21

2．木製・鉄製遺物の保存処理 …… 24

3．普及活動 …… 25

Ⅲ．事 務 報 告 …… 26

Ⅰ 調 査 報 告

昭和63年度に実施した発掘調査の概略は次のとおりである。これらの内、高崎遺跡（第７次）と新田遺跡（第10次）については年度内にそれぞれ報告書を刊行するため、その他のものについて以下概要を報告する。

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	原因	担当職員
新田遺跡(第７次)	多賀城市山王字北寿福寺１－１他	昭和63年４月26日～11月19日	2,640㎡	宅地造成	相沢、千葉
新田遺跡(第８次)	〃 山王字北寿福寺14－１他	昭和63年４月26日～９月17日	3,150㎡	宅地造成	石川、石本
橋本囲貝塚(試掘)	〃 大代５丁目10	昭和63年５月13日～６月６日	300㎡	開発計画	相沢、石川
山王遺跡(第７次)	〃 山王字山王Ⅱ区180－１外	昭和63年５月24日～７月26日	720㎡	宅地造成	滝口
新田遺跡(第９次)	〃 新田字後111－１外	昭和63年９月20日～12月10日	1,100㎡	宅地造成	石川、石本
山王遺跡(試　掘)	〃 山王字千刈田	昭和63年11月４日～５日		公共下水道工事	高倉
山王遺跡(第８次)	〃 山王字東町浦47他	昭和63年11月14日～ 平成元年２月４日	1,160㎡	宅地造成	相沢、千葉
高崎遺跡(第７次)	〃 高崎１丁目中央公園地内	昭和63年11月21日～ 平成元年１月25日	1,220㎡	中央公園建設	高倉
新田遺跡(第10次)	〃 山王字北寿福寺６番２	昭和63年12月12日 平成元年２月17日	620㎡	幼稚園建設	石川、石本

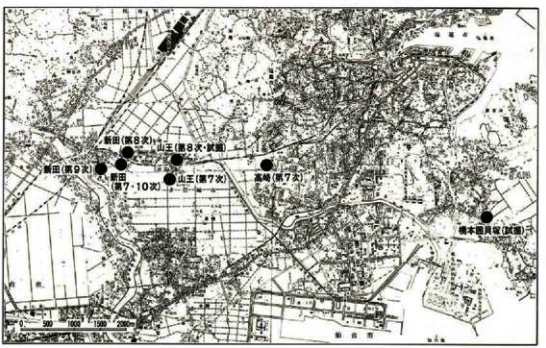


図１　調査区位置図

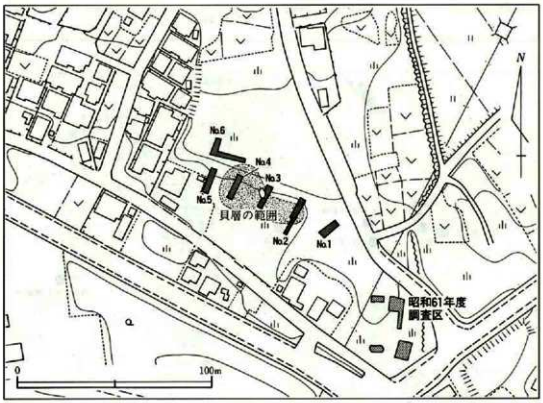
(1) 橋本囲貝塚

1. 遺跡の位置と環境

橋本囲貝塚は松島丘陵に属する小丘陵の突端部に位置し、本遺跡は南面に広がる砂層上に立地している。本遺跡の周辺には各時代にわたり数多くの遺跡が立地している。特に貝塚には見るべきものが多い。主なものを挙げてみると縄文時代では、国指定史跡である大木囲貝塚をはじめ左道、吉田浜、鬼ノ神山、二月田貝塚がある。弥生時代の所産では「板痕のある土器」で著名な袋形囲貝塚が知られている。ところで、本遺跡については大正８年に東北大学医学部の長谷部言人が調査を行ない、ハマグリ、カキを主体とする数枚の貝層を検出し、更にすぐそばにある横穴古墳から人骨等も採集している。このように学史的にも古くから知られていた貝塚であるが、これ以降は発掘調査は行なわれず、昭和61年になってガソリンスタンド建設に伴う事前調査が行なわれた。この調査では遺構、遺物等は全く検出されず、貝層の範囲等はこれより西側に分布することが予想された。

2. 調査の概要

調査は開発申請のあった約8,000㎡を対象に行なった。 調査は不明であった貝層の範囲及びその厚さ、丘陵部に開口している横穴古墳の基数を確認することを主眼とした。調査は開発対

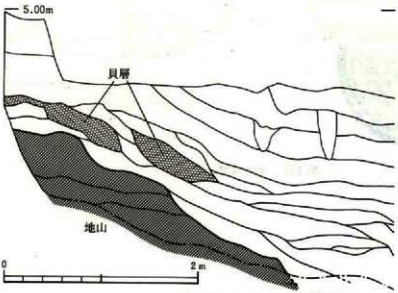


第１図　調査区位置図

象区内に六ヶ所のトレンチを設定した。各トレンチには東側よりNo.1～No.5、横穴が開口している丘陵部にL字型に設定したトレンチをNo.6とした。このうちNo.1、5、6トレンチについては遺構が検出されなかったため、No.2、3、4トレンチについて述べることにする。No.2トレンチでは、表土下約70cmの地点で貝層を検出した。分布状況はトレンチ南側で認められたもので、凝灰岩ブロック、製塩土器の小破片が含まれる黒色土層上に堆積していることが判明した。No.3トレンチでもNo.2同様、貝層を検出した。検出された貝層は、砂層に挟まれた状況で認められた。このトレンチ内中央部には大きな土坑状の掘り込みが確認され、この掘り込みを掘り上げることで貝層の堆積状況、及びその厚さを知る手掛りとなった。断面観察の結果、砂層が北から南に向かって大きく傾斜し、この傾斜に沿って貝層が厚く堆積する状況が認められた。貝層の厚さは約2m近くあり、しかも遺存状況も良好であった。No.4トレンチでもNo.2、3に見られた貝層が全面に認められた。このトレンチ内には北側でマガキを集中して出土する地点があり、更に焼土、灰等の分布から作業場等の存在が考えられた。一方これと並行して行なわれた横穴古墳の確認調査では、丘陵斜面より未開口の横穴古墳1基を含め、合計10基の横穴古墳を確認したが未開口の横穴古墳以外は、いずれも後世の削平を受けている。

3. 出土遺物

遺物は土納袋で約40袋ほど出土しているが、大部分は貝層から出土したものである。横穴古墳からも出土しているが量的には少ない。これらの遺物はほとんど未整理のため、これまで観察したものについてのみ取り上げる。貝層中より出土した土器類には製塩土器、縄文土器がある。量的には製塩土器が多い。製塩土器は底部が平底を呈するものであるが、全体の器形がわかるものはない。縄文土器の器形は深鉢が主体となっており、他に浅鉢、壺等が見られるが量的には少ない。横穴古墳から出土したものには土師器杯、須恵器杯、高台付杯、椀等がある。自然遺物について見るとハマグリ、マガキが圧倒的に多い。この他にはアサリ、イシダタミガイ、ナミマガシガイ、イガイ、オキシジミガイ、ヤマトシジミ、クボガイ、スガイ、チ



第2図　No.3トレンチ断面図

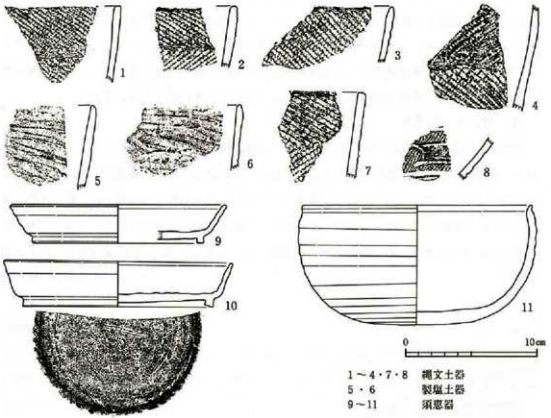
ョーセンハマグリ、アワビ等がある。角や骨等も若干ではあるが出土している。

4. ま と め

1．当初の予想に反して貝層の範囲が東西45m×南北25mの広範囲に及んでいることが判明した。しかも貝層の遺存状態も良好であった。この貝層の時期については、出土した土器から縄文時代晩期と考えられる。

2．横穴古墳については、未開口１基を含め10基の横穴古墳を確認することができた。

3．本貝塚は縄文時代晩期の貝塚としては当市唯一のものであり、学史的及び学術的にも貴重な遺跡である。



第３図　出土遺物

（2）新　田　遺　跡（第7次）

1．遺跡の立地

新田遺跡は、多賀城市の西端部に位置する遺跡である。西側を流れる七北田川によって形成された自然堤防上に立地しており、海抜7～8メートルを計る。昭和56年から始まった本格的な調査によって、古墳時代から中世に至る集落の様子が次第に明らかになってきている。

2．調査に至る経緯

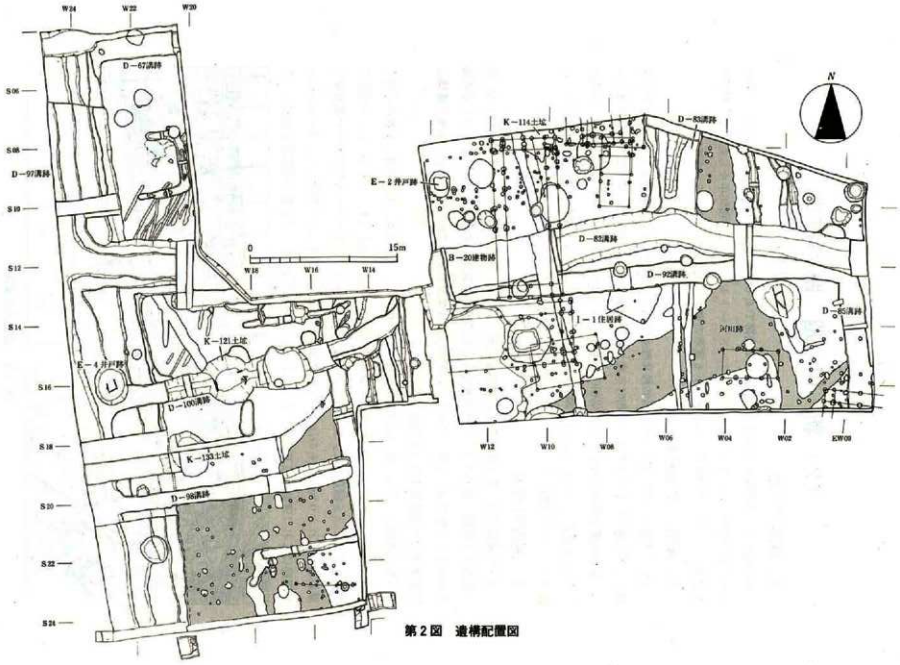
今回の調査は、昭和62年3月に福仙興業株式会社より提示された宅地造成工事に伴う事前調査として実施したものである。昭和61年度から継続事業として実施し、今年度が最終年度である。調査対象面積14,200㎡のうち昭和61年度には 1,539㎡、昭和62年度には 3,090㎡、今回は2,640㎡を調査し、合計 7,269㎡を調査したことになる。今年度の調査は排土処理の都合上、前後2回に分けて実施した。

3．調査の概要

今回の調査区は、第6次調査区の南側に位置している。調査区内の層序は寿福寺地区内の他の調査区と同様、表土の下に中世の遺物を含む黒褐色砂質土（第Ⅱ層）があり、その下が灰褐色の砂質土（第Ⅳ層）となっている。古代の遺構は第Ⅵ層上面で検出されるが、中世の遺構は第Ⅲ層上面と第Ⅳ層上面とで検出している。

中世の遺構としては、掘立柱建物跡10棟、井戸跡34基、溝跡26条、土坑24基、多数の小柱穴がある。D－97溝跡は、第6次調査で発見した館跡の西辺を画するものと考えられ、5時期の重複があることを確認した。第Ⅲ層との関係についてみると、最も古いA期のものが第Ⅲ層に覆われ、それより新しいものはすべて第Ⅲ層を掘り込んでいることが判明した。D－82・100・98溝跡はこれに連結する東西溝である。D－82・100溝跡は南北に走るD－83溝跡と連結してお

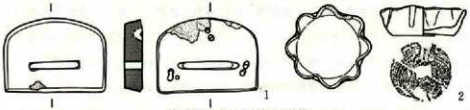
第1図　調査区位置図


W24
W22
W20
D－67溝跡
S06
S08
D－97溝跡
S10
S12
S14
S16
S18
S20
S22
S24
0
15m
W18
W16
W14
E－2井戸跡
K－114土坑
D－83溝跡
D－82溝跡
B－20建物跡
D－90溝跡
I－1住居跡
D－85溝跡
E－4井戸跡
K－121土坑
D－100溝跡
K－133土坑
D－96溝跡
N
W12
W10
W08
W06
W04
W02
E W00

第２図　遺構配置図

り、館の内部を区画するための溝と考えられる。D－85・92溝跡は第Ⅳ層上面で検出した溝跡で、3時期の重複があることを確認した。調査区東端部付近でほぼ直角に連結し、方形の区画を成すものとみられる。掘立柱建物跡は調査区東側に比較的集中しているが、館を囲む溝跡との関係は必ずしも明らかでない。B－20建物跡は今回検出した建物跡では最も大きなもので7間四面の南北棟と推定される。多くの柱穴に柱の切り取り穴が伴い、その埋土や柱痕跡には炭化物や焼土が混入しているものが見られる。井戸跡も東側に集中し、西側には少ない。素掘りのものや井戸側を備えたものがあり、構造的にはバラエティーが認められる。遺物は隣接する第6次調査区に比べると少ないが、陶磁器類をはじめとして木製品、石製品、金属製品、植物遺体などが多数出土している。このうち、特筆すべきものとして板碑が挙げられる。原形をとどめるものはなく、E－2井戸跡やその周辺から多数の破片となって出土している。

古代の遺構としては、竪穴住居跡1棟、井戸跡1基、溝跡7条、河川跡などがある。I－1竪穴住居跡は壁がわずかに12cm残存していた。カマドや主柱穴は検出できなかったが、国分寺下層式の杯や甕などが出土している。D－67溝跡は第6次調査で発見しているものと同一の溝と見られるものである。今回の調査区西側に至り、南へほぼ直角に折れ曲がることを確認した。上幅約3m、深さ約1mを計り、断面は逆台形を呈する。何らかの区画を成す溝と見られるが性格については不明である。遺物は土師器、須恵器、赤焼き土器などの他、中国越州窯産と見られる青磁や灰釉・緑釉陶器、石製の丸鞆（第3図1）などが出土している。



1．丸鞆
2．入子（瀬戸窯産）
※スケール 2/3

第3図　第Ⅱ層出土遺物

4．ま　と　め

1．第5・6・8次調査において、大溝をめぐらした館跡の北辺と東辺を検出しているが、今回の調査でその西辺を確認した。

2．この館跡の内部は溝によっていくつかの郭に区画されている。郭には、それぞれ建物跡と井戸跡がセットで配置されている。

3．大溝をめぐらした館が構築される以前、同所には小規模な館が存在したことが判明した。

4．年代は、大溝をめぐらした館が室町時代、それ以前の小規模な館は鎌倉時代と考えられる。

5．古代の遺構としては、多賀城外郭南辺築地と方向を同じくする溝跡などを発見している。石帯や高級な施釉陶磁器が出土していることなどを考え併せるならば、本遺跡は国府多賀城によって規制を受けた地域として位置づけることが可能であろう。

（3）新　田　遺　跡（第8次）

1．遺跡の立地と環境

本調査区は、新田遺跡の包蔵地内の北東部に位置し、北側を通る県道泉～塩釜線と南側を通る東北本線に挟まれた区域である。これまでに東側約100mの地点で、新田遺跡第４次調査が実施され、また東北本線を挟んだ南側で第５～７次調査が実施されている。調査区の現況は、標高約６mの畑地及び水田である。

2．調査の経緯と方法

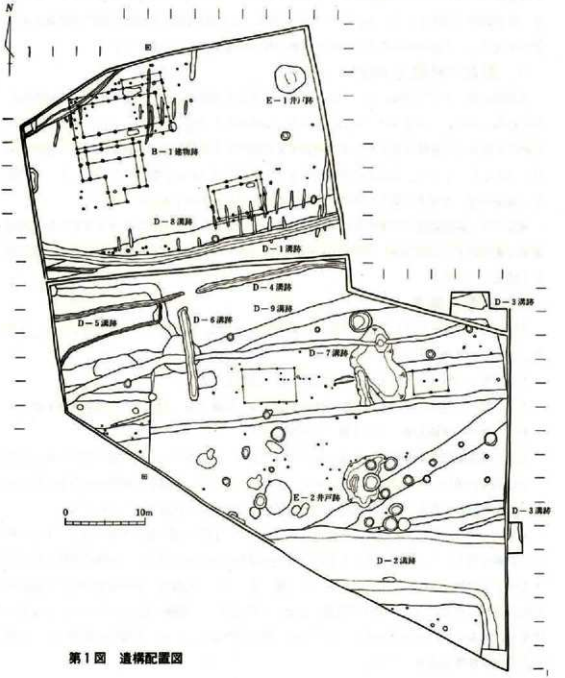
本調査については、宅地造成工事に伴なう事前調査として昭和62年３月に行った試掘調査の結果を受けて、今年度に本調査を実施したものである。試掘調査においては、調査区のほぼ全域で遺構が確認されたことから、今回の調査では対象地域の広さや排土場所を考慮して、前後２回に分けて調査を実施した。なお、発掘基準線は国家座標の方位を使用している。

3．調査の概要

本調査区は、長年水田として利用されていたため削平が著しく、検出された遺構は大部分が地山面での確認であった。これらは出土遺物などから大きく中世と古代のものに分けられる。

中世の遺構は、掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡などがある。このうち、調査区南側を東西方向に延びるD－２溝跡は、この西側で実施した第５・６次調査で検出された館跡を方形に囲む大溝の延長と考えられる。この溝跡は調査区南東隅でほぼ直角に屈曲し、さらに南側へと続いている。したがって、この位置は大溝の北東コーナーにあたり、北辺の規模が約120mに及ぶことがこのことから確認できた。なお、埋土の状況から同一位置で４時期以上の変遷があることも認められた。D－３溝跡は、D－２溝跡の屈曲部の北側に連結する南北溝で、北東隅に設けた拡張区において３時期の重複を確認した。このうち一番新しい時期には、西側に屈曲しD－４溝跡に接続するとみられる。これらはD－１・５～７溝跡も含めて、館内の区画としての性格を有すると考えられる。建立柱建物跡は４棟検出しているが、複雑な間取りを持つB－１建物跡を除けば、いずれも小規模なものである。また建物どうしの重複や建て替えも確認されなかった。井戸跡は23基と数多く検出され、調査区南側に集中する傾向にある。素掘りのものが圧倒的に多いが、わずかにE－１・２井戸跡で四隅に支柱を立て、四辺に葦材を巡らして簡単な井戸側を構築している例を確認した。遺物には陶磁器をはじめ木製品、硯、石臼、砥石、古銭などがあるが、出土量は僅少である。しかし、木製品には比較的保存状態が良好なものが多く、漆器、柄杓、板草履などが井戸跡を中心に出土している。以上のような調査成果から、本調査区で発見された館跡は、大溝を巡らした館跡とほぼ同時代に存在したと考えられ、室町時代を中心とする年代があたえられると思われる。

古代の遺構には、溝跡、土坑などがある。このうちD－8とD－9溝跡は並行する東西溝で、規模や埋土の状況もきわめて似ていることから、道路の側溝になるものとみられる。これを道路跡と考えた場合、その幅は約12mを計る。年代は出土遺物などから9世紀から10世紀前半に位置づけられる。その他の遺構の年代についても、埋土中に10世紀前半に降下したといわれる灰白色火山灰を含むものもみられることなどから、おおむね平安時代前半頃と考えられる。



第1図　遺構配置図

（4）新　田　遺　跡（第9次）

1．遺跡の立地と環境

本調査区は、新田遺跡の包蔵地内の北西部にあたり、西方約200mの位置を七北田川が南流している。現況は標高約7mの畑地である。過去に行われた近接地での調査では、昭和39年に本調査区の南西約50mの西後地区で、土取り工事の際に古墳時代の土器が多量に出土したのに伴い緊急調査が実施されている。また、昭和56年には北東約200mの地点で新田遺跡第1次調査が実施され、奈良時代の竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡などが発見されている。

2．調査の経緯と方法

本調査に至るまでの経緯については、昭和62年4月に地権者より当該地における宅地造成計画の提示があり、これを受けて昭和63年1月に試掘調査を実施している。この調査においては、溝跡や土壙などの遺構を発見し、また調査区東半部では古墳時代から中世にかけての遺物が多量に出土したことより、各時代の遺構が複合した集落跡の存在が予想された。したがって、再度の協議の後、地権者の協力を得て今回の調査を実施したものである。

調査では、試掘調査の結果や排土場所を考慮して、調査区を2ヶ所に分けて設定した。調査面積は東側のⅠ区が約760㎡、西側のⅡ区が約340㎡である。なお、発掘基準線は国家座標の方位を使用している。

3．調査の概要

今回の調査で発見された遺構の年代は、古墳時代、古代、中世に大きく3区分できる。各時代ごとの発見遺構は次のとおりである。

古墳時代……竪穴住居跡5軒　祭祀遺構2基　溝跡1条他

古　　代……竪穴住居跡1軒　掘立柱建物跡4棟　溝跡9条　土壙　その他小溝跡多数

中　　世……溝跡1条　土壙2基　その他小柱穴

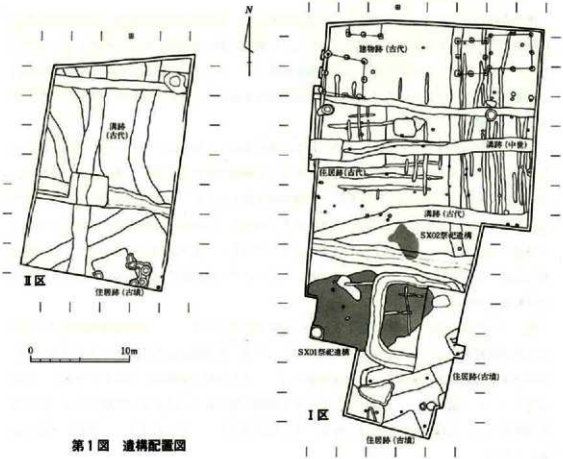
なお、現在整理作業が始まったばかりの段階であり、また本書のページ数の関係から、ここでの説明は古墳時代に限定することにする。さらに、その中でも特異な遺物出土のあり方を示した祭祀遺構をとり上げ、その概略と出土土器の特徴を中心に記述することにする。

まず、古墳時代に属する竪穴住居跡についてみると、Ⅰ区の南半部で方向を同じくする4軒の住居跡を発見している。いずれも多くの部分が調査区外にかかるため、全体の規模は把握できなかった。出土遺物には土師器杯・高杯・甕・壺があり、古墳時代前期及び中期の土師器の特徴が認められる。また、Ⅱ区の南端で発見した住居跡は、規模が北辺で約3.6mを計るもので東辺の中央付近にカマドが設けられている。出土遺物は少ないが、古墳時代後期のものと思われる土師器甕が出土している。

祭祀遺構としたものは、Ⅰ区の南西部で発見したSX01祭祀遺構と、その北側に近接して発見したSX02祭祀遺構がある。

SX02祭祀遺構は、河川跡とも思われる東西方向の２条の溝状落ち込み（第１図中に表示なし）に挟まれた平坦面において、東西約３m、南北約3.5mの範囲内に遺物がまとまって出土している。その内訳は、土師器杯１点、高杯８点、壺10点、甕１点のほか、石製模造品の臼玉51点、有孔円盤23点、剣形品20点である。これらは北側と南側の２ヶ所にまとまりの傾向が認められるが、出土状況からは配置等の明確な規則性はうかがえなかった。なお杯と小形の壺の中に１～10個の臼玉が納められていた例が６件確認できた。

土師器の各器種の大まかな特徴をあげると、まず壺のうち中形から大形のものは、複合・有段口縁をもつものである。これらには球形の体部の張りが強いものと、やや長胴化したものに分けられる。また、このうち３点は類似した有段口縁壺で、いずれも押しつぶしたような体部をもち、口縁部が大きくラッパ状に開くものである。なお口縁部の段はさほど明瞭ではない。高杯は、杯部がすべて無段平底を呈し、底径が小さいものである。脚部は円柱状に近いものも



第１図　遺構配置図

認められるが、大部分は円錐台状である。また脚裾部が明瞭に屈曲するものも存在する。すべて円窓はみられない。器面調整については、各器種とも軽いヘラミガキ調整が主体で、ハケメ調整はわずかに認められる程度であり、調整や胎土から全体的にはやや粗雑な印象を受ける。以上のような特徴を概観すると、これらは土師器編年でいう「塩釜式」の比較的新しい段階の土器群の特徴を色濃くもっているようである。しかし、整理・検討が不充分な現時点においては、型式や年代について考察するまでには、なお検討の余地が多く残されているといえる。

次にSX01祭祀遺構についてみると、この遺構はSX02祭祀遺構の南側を限る溝状の落ち込みが、半ば埋まった状態によって形成された緩やかなくぼみ部分の中央付近に多量の土師器がまとまって出土している。ほとんどの個体が完形もしくはそれに近い状態で残っており、その数は200点近くにのぼる。各土器の出土状況をみると、甕等の大形の器種を中央付近に立てて並べ、さらに杯や壺等の比較的小形のものをこの上に重ねたり、あるいは周囲に配置したような傾向がうかがえる。また、堆積土は地山に類似した黄褐色砂質土のほぼ単層で、各土器は北側からの圧力を受けて倒壊した様子が観察できる。このことから、この遺構には何らかの要因で一挙に土砂が堆積したものと考えられる。

出土遺物については、その大部分が土師器であるが、このほかに白玉11点、コハク玉1点、紡錘車1点、砥石1点が出土している。なお、小形壺の中に3点の白玉とコハク片が、手づくね土器の中に白玉1点が納められていた例を確認している。また土師器の内訳は、杯が56点以上、甕が58点以上を数え、両者で土器全体の約65%を占める。その他壺10点、鉢6点、甑3点、手づくね土器38点である。

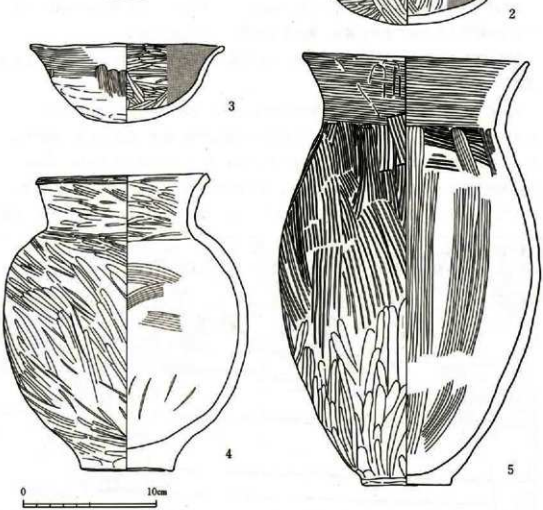
このうち杯は、すべて丸底のもので、若干の例外を除いて内面はヘラミガキ・黒色処理されている。これらを形態によって分類すると大きく3種類に分けられる。主体を占める種類は、口縁部と底部の境の内外面に段を有し、口縁部が外反するもの（参考資料第2図1）で、出土量は杯全体の約75%を占める。次に個体数の多い種類は、口縁部と底部の境に段を有する点では前者に共通するが、口縁部が直立気味に立ち上がるもの（参考資料第2図2）で、出土量の割合は約15%である。もう一種類は段を有しないもので、口縁部が外反し鉢形に近いもの（参考資料第2図3）である。

甕については、体部が球形を呈するもの（参考資料第2図4）と、長胴で砲弾状を呈するもの（参考資料第2図5）の2種類に大きく分けられる。両者の比はおよそ5：4である。これらの基本的な器面調整をみると、体部外面にヘラミガキ調整が施されているものが多く、それ以外ではハケメ調整と、ハケメの後ヘラミガキ調整が施されているものが観察できる。また長胴形のものは、口縁部と体部の境で外面に段を形成するものもみられるが、いずれもさほど顕著ではない。

以上のような杯や甕に代表される特徴をみると、これらは土師器編年の「栗囲式」の特徴に、より多くの共通点を見い出せる。しかしながら、個々の点で前段階の型式の特徴にも類似するような傾向も観察できることから、現時点では型式や年代の位置づけまでには至っていない。

〈参考文献〉

1. 宮城県教育委員会「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」宮城県文化財調査報告書 第77集（1981）
2. 仙台市教育委員会「栗遺跡」仙台市文化財調査報告書 第43集（1982）
3. 宮城県教育委員会「杓木橋横穴古墳群・宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書 第96集（1983）
4. 宮城県教育委員会「今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚」宮城県文化財調査報告書 第104集（1985）



第2図　SX01祭祀遺構出土遺物

（5）山　王　遺　跡（第7次）

1．調査経過

本調査については、昭和62年９月に株式会社鎌田建設より宅地造成の開発計画が提示され、本件申請についての協議を行った。申請地は、埋蔵文化財包蔵地の隣接地に当るが、昭和60年度に申請地より約50m東側の地点を調査した際に平安時代から中世にかけての遺構・遺物が発見されており、本件申請地まで遺構が延びている可能性があるため、試掘調査を実施することにした。試掘調査は、昭和62年12月７日～15日まで実施し、その結果、古代の遺構が検出されたので、再度、原因者と事前調査について協議を行った。

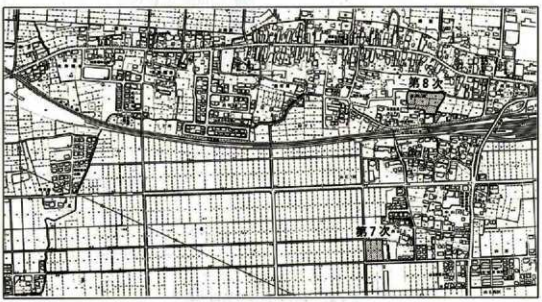
本調査区は、ＪＲ東北本線陸前山王駅より南西約600m に位置し、現況水田である。

2．調査成果

調査区内の基本層位は、第Ⅰ層暗灰黄色土粘質シルト（耕作土）、第Ⅱ層灰色土粘質シルトで旧水田の耕作土である。その下層は、黄灰色土砂質シルトで地山である。

今回の調査で検出した遺構は、溝跡62条、土坑15基、ピット多数である。ここでは、おもな遺構のみ記述することにする。

ＳＤ07・08溝跡は、埋土中に10世紀前半に降下したといわれる灰白色火山灰が小ブロック状に含まれている。前者は、調査区南東部で検出した東西方向に延びる溝跡であり、幅約0.7m、深さ約25cmを計る。後者は、調査区の東側で南北方向に延び、中央部でほぼ直角に西方向に延びる溝跡である。南北方向では、幅約1.5m、深さ約50cmを計り、東西方向では、幅約0.8m、深さ約30cmを計る。遺物は、土師器杯（第３図１・２）・甕（第３図３）、須恵器杯・甕、赤焼



第１図　調査区位置図

き土器杯（第３図４）がある。

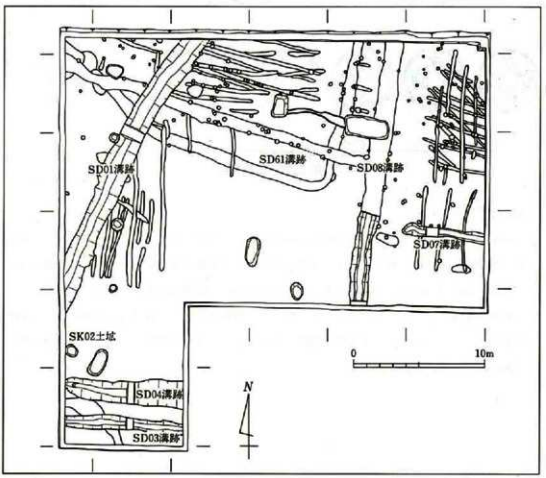
ＳＤ61溝跡は、調査区の東側で南北方向に延び、中央部でほぼ直角に西方向へ屈曲して延びる溝跡である。ＳＤ08溝跡と重複関係があり、この溝跡より古い。幅約0.8m、深さ約30cmを計る。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯（第３図６・７）・甕、壺がある。

この他に、幅約0.2～0.3mで、深さ約５～15cmの小溝跡群を検出している。ＳＤ07・08・61溝跡と重複関係があり、ＳＤ07・08溝跡より古く、ＳＤ61溝跡より新しい。遺物は少なく、土師器杯（第３図５）・甕、須恵器杯・甕などの小破片が出土している。

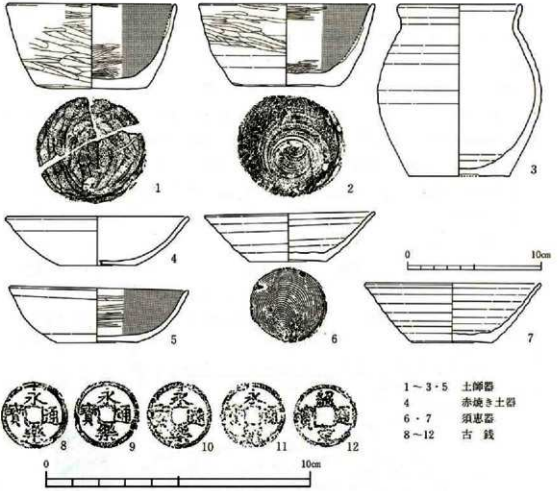
ＳＫ02土坑は、調査区の南側で検出した土坑で、短径約0.8m、長径約1.0mの楕円形を呈し、深さ約30cmを計る。遺物は、人間の歯とともに古銭（第３図８～12）が５枚出土している。

３．ま と め

１．今回の調査の結果、古代の遺構としては、溝跡、土坑、ピットがある。中でも、ＳＤ07・08溝跡は、埋土中に灰白色火山灰が含まれており、同時期に機能していたと考えられることや、ＳＤ07溝跡がＳＤ08溝跡に対し、東へほぼ直角に延びることから、何らかの区画を行っ



第２図　遺構平面図



第3図　出土遺物

た溝跡と考えられる。

2．SD07・08溝跡の年代は、灰白色火山灰が小ブロック状に含まれることや、出土した遺物から10世紀前半以降と考えられる。また、この2条の溝跡に切られているSD61溝跡および小溝跡の年代は、出土した遺物より9世紀中頃から10世紀前半と考えられる。

3．中世の遺構としては、土坑があるが、中でも、SK02土坑は、埋土より人間の歯や古銭が出土していることから、土坑墓の可能性がある。また、土坑の年代は、出土した古銭より、15世紀以降と考えられる。

（6）山　王　遺　跡（第8次）

1．遺跡の立地と環境

本遺跡は、旧七北田川と砂押川によって形成された自然堤防上に立地し、東西約2km、南北約1kmの広範囲にわたる遺跡である。古墳時代から近世にかけての複合遺跡であり、これまでの発掘調査では古墳時代中期、平安時代の遺構・遺物が多く出土している。今回の調査区は、ＪＲ東北線陸前山王駅から約500m西方に位置する。

2．調査方法と経過

本調査は、昭和62年9月に大和団地株式会社より提示された宅地造成工事に伴う事前調査である。調査日程の都合上、前期と後期（平成元年4月～6月）に分けて行ない今回はその前期分にあたる。調査箇所は対象地域の西半部で昭和58年度に実施した第4次調査区の東側に隣接している。なお発掘基準線は国家座標の方位をとっている。

3．調査概要

調査区内の基本層位は、第Ⅰ層旧水田耕作土及び盛土、第Ⅱ層～第Ⅳ層が自然堆積による粗砂層である。第Ⅱ層上面は古代の遺構検出面であり、それより下層が古墳時代中期頃の遺物包含層である。

今回の調査で検出した遺構は、道路跡1条、掘立柱建物跡1棟、井戸跡2基、溝跡8条、土壙18基、ピットである。ここでは主要な遺構のみ記述することにする。

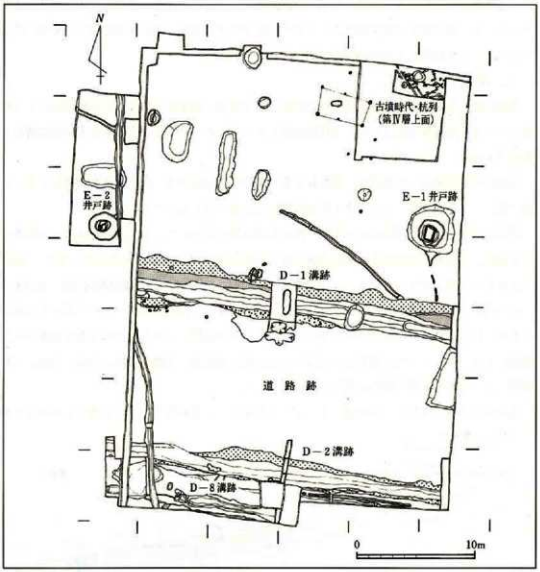
調査区南半では、路幅約12mの東西に延びる道路跡を検出した。この道路跡は第4次調査区でも検出しており、途中の未調査分を含めると約150mにわたって検出したことになる。両側には素掘りの側溝を伴っており、北側側溝（Ｄ－1溝跡）には4時期、南側側溝（Ｄ－2溝跡）には3時期の重複が認められる。規模は古い段階から新しい段階になるにつれて縮小する傾向にあり、Ｄ－2溝跡Ｂ期の埋土中には灰白火山灰が自然堆積していた。方向は多賀城外郭南辺築地とほぼ一致している。遺物は、側溝から土師器、須恵器、赤焼き土器、青磁、白磁、灰釉陶器、瓦、漆器椀、盤、曲物容器等が出土している。

道路跡の北側に隣接して井戸跡（Ｅ－1・2井戸跡）2基を検出した。両者とも井戸側を備

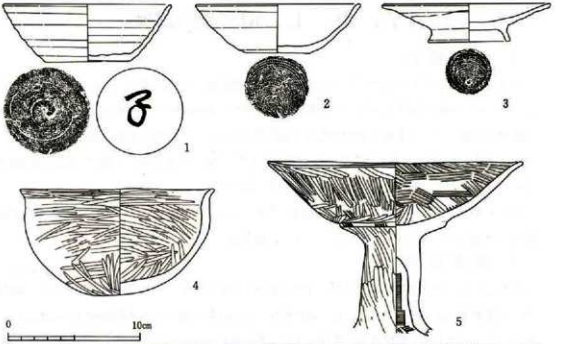
第1図　第2・4・8次調査遺構配置略図

えたものである。E－1井戸跡は、同位置で重複しており新段階の掘り方埋土には灰白色火山灰のブロックが多量に混入している。遺物は土師器（墨書土器を含む）、須恵器、赤焼き土器、曲物底板、斎串等が出土している。E－2井戸跡は、底面に曲物の水溜めを備えていた。遺物は土師器、須恵器、曲物容器、植物遺体（ひょうたん）等が出土している。

D－8溝跡はD－2溝跡の南側を並行して走るもので、ほぼ同位置で3時期の重複がある（A～C期）。D－8(C)溝跡とD－2(B)溝跡は、埋土がオーバーフローして堆積している様子を観察しており、ほぼ同時期に埋まったものと考えている。遺物は土師器、須恵器、赤焼き土器等が出土している。



第2図　遺構平面図



No	種別	器種	遺構	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	杯	D－1溝	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	12.6cm	6.7cm	4.4cm	底部墨書「千」
2	赤焼き土器	〃	〃	〃 〃 〃 赤環り	〃	11.2cm	5.2cm	3.8cm	
3	〃	高台付皿	E－1井戸	〃 〃 〃 〃	〃	12.4cm	6.4cm	2.9cm	
4	土師器	杯	第Ⅳ層	口縁ヨコナデ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	14.8cm	—	8.0cm	内外面朱塗り
5	〃	高杯	第Ⅲ層	杯部 ハケメ→ヘラミガキ	ハケメ→ナデ ヘラミガキ	19.8cm	—	13.3cm	〃
				脚部 ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラナデ				

第３図　出土遺物

第Ⅱ層下の調査

第Ⅱ層下の調査は、調査区北側に８×８ｍの区画を設定して行なった。第Ⅱ～Ⅲ層中からは古墳時代中期の土師器、須恵器、石製模造品が出土した。第Ⅳ層上面では径10～15ｍの丸太杭列とその周辺に枝材が並んでいる状況が見られた。

４．ま　と　め

１．今回の第８次調査では古代の道路跡とこれに隣接して井戸跡２基を発見した。

２．古代の遺構の年代については、出土した土器の年代と道路側溝（Ｄ－１㈽・Ｄ－２㈿）に灰白色火山灰の自然堆積が認められることから９世紀～10世紀中頃に位置づけられる。また、井戸跡もこの時期と考えている。

３．道路側溝にはＤ－１溝跡で４時期、Ｄ－２溝跡で３時期の変遷があり、長期にわたって使用されていたことがうかがえる。

４．道路跡は、多賀城外郭南辺築地の方向と一致するように計画されたものと考えられる。

５．第Ⅱ層下の調査では、古墳時代中期頃の杭列が検出されたが、これらの詳しい年代、性格については次年度本格的な調査を行ない、明らかにしたい。

（7）山　王　遺　跡（試掘）

1. 調査経過

山王遺跡における多賀城市公共下水道工事関連の調査は、今回で2年目に当る。今年度の埋設ルートは、昨年度調査を実施した多賀城第二中学校の東側道路から連続するもので、県道泉塩釜線を通過して、ＪＲ東北本線陸前山王駅西側の線路に沿って走る道路に通じる南北道路敷までの延長306.4mである。調査箇所は、陸前山王駅の西約180mの地点で後藤三郎氏宅の西側道路敷に位置する。調査は、ここに設置される立坑を対象として実施した。

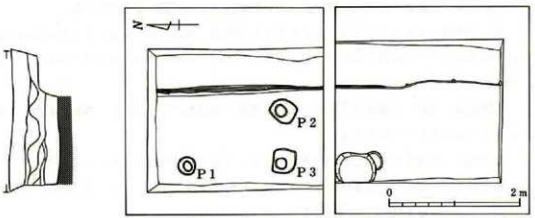
当該工事については、市下水道課と協議して来たが、昭和63年10月19日付けで埋蔵文化財発掘通知が提出され、11月4日～5日にかけて試掘調査を行なったものである。

2. 調査結果

調査は、№2立坑設置場所に南北 5.4m、東西 2.2mのトレンチを設定して行なった。調査区内の基本層位は3層に大別される。道路舗装による砕石・盛土が厚さ約20cmほどに盛られており、その下にⅠ層（黒褐色土）、Ⅱ層は4層に細分されるが粘性の強い床土の特徴をもつ。Ⅲ層は暗青灰色の砂質土層で安定した堆積状況をもっている。その下層は青灰色の砂土層となる。

遺構は、深さ40cmのところでトレンチの東壁に沿って幅50～60mのテラス状の平坦面を確認した。テラス状の遺構は、高さ約20cmを有しその壁面に幅10cmの板材を横に据えており、南側で杭が打ち込まれている様子が観察された。おそらくテラス状遺構の土留として施設されたものと思われる。

テラス状遺構の西側Ⅳ層面で小柱穴3基とピット1基を検出した。柱穴は一辺約40cmの隅丸方形を呈し径15cmの柱痕跡をもつもの（Ｐ2、Ｐ3）と、径約25cmの円形を呈するもの（Ｐ1）がある。遺物は、土師器、須恵器、瓦、灰釉陶器、近世以降の陶器、磁器などが出土している。



第1図　№2立坑・遺構平面図・北壁セクション図

Ⅱ 事 業 報 告

1. 展　示

(1) 企画展示について

当センターでは年に一度、企画展を行なっている。開館初年の昨年度は「多賀城周辺を掘る！ ―多賀城とともに生きた人々のくらしを探る―」と題し、多賀城周辺遺跡の調査成果から多賀城を支えた人々の生活にスポットをあててみた。今年度は第２回目で、「柏木遺跡―古代の鉄生産を探る―」を１月31日～５月７日までの期間で開催している。

市内の歴史を時代を追って網羅的に展示している常設展示とは異なり、企画展は当センターが行なった発掘調査成果の中から特にテーマを選び、同時代の県内外の動きをからめながら、内容を構成している。多賀城市内の遺跡といえば多賀城跡のみがあまりに著名で、その他の遺跡についてはなじみがうすいかと思われる。これらの遺跡の調査成果を基に歴史の一端を再現し、あわせてその重要性を広く一般に理解していただくことも当センターの責務である。今後ともこの立場に立って展示を行なっていきたいと考えている。

(2) 第１回企画展「多賀城周辺を掘る！ ―多賀城とともに生きた人々のくらしをさぐる―」

期間：昭和63年３月８日～６月12日

①展示の目的

市内にある遺跡の調査のなかでも特に注目されているものの一つに、多賀城周辺に広がる新田・山王・市川橋・高崎の各遺跡の調査成果がある。これらの遺跡は多賀城と同時代の、しかも多賀城の規制をうけた地域であったことがわかってきた。さらに近年、国府の研究はそれをとりまく都市空間にまで範囲を広げており、多賀城の姿をより広い視点から解明するため、周辺遺跡の調査は重要性を増してきている。そこで、第１回企画展は多賀城周辺遺跡をテーマとして実施した。

②展示の趣旨

多賀城周辺に存在する遺跡の発掘調査の結果、それらは多賀城に密接にかかわる、日常生活の場であることが判明した。展示では発見された多くの遺物をもとに、多賀城を支えた人々のくらしに焦点をあててみた。

③展示の内容

４遺跡の調査成果を“すまい”と“ひと”の２テーマに分け、実物資料、写真・イラストパネルの他、竪穴住居のカマド付近を復元し、さらに井戸の模型を製作するなどして生活の様子を再現した。また一つの試みとして、土器30余点を、直接手に取ることができるように展示した。ガラス越しに見るのとは違い、より印象が強かったのではないかと思う。一方、同時代の一般集落とは異なる性格を移動式カマド、灰釉・緑釉陶器、石帯、銀環などで特徴づけたが、その意図が

伝わったかどうか、展示テーマにかかわるだけに工夫の余地を残したと言えよう。また、周辺の様子が、時代の推移とともにどの様に変容していくかということにまでは今回内容が及ばなかった。これらの点については、今後の調査資料の蓄積を待って改めて展示に反映させていきたい。

(3) 第2回企画展「柏木遺跡ー古代の鉄生産をさぐるー」

①展示の趣旨

多賀城跡の東方約4kmに位置する柏木遺跡から、奈良時代の製鉄所が発見された。この遺跡は陸奥国府のおかれた多賀城直営の製鉄所跡と考えられ、大きな反響をよんでいる。展示では柏木遺跡の成果を紹介しながら、これまで不明であった古代の鉄づくりにスポットをあててみた。

②展示の内容

柏木遺跡の調査成果をベースとして、鉄づくりの流れをわかりやすくするため、原料、生産、加工、流通の4コーナーを設定した。資料は柏木遺跡出土遺物、県内外からの借用遺物、写真パネルの他、地形模型、鉄滓剣ぎ取りなどを使用した。また、古代の鉄づくりのイメージを感じてもらうため、製鉄炉の構造や作業のようすを推定復元したイラストパネルも作成した。

導　入

柏木遺跡と多賀城跡との位置関係、調査概要、鉄づくりのながれなどをパネルで示し、展示の方向づけを行なった。

コーナー1 ＜原料＞

鉄の原料となる砂鉄採集の様子、木炭生産のありさまをイラストパネルで示し、実物も展示した。また、柏木遺跡で発見されたトンネル状木炭窯と、それよりやや古い形態の横口式木炭窯について写真をパネルで展示して古代の2種類の木炭窯を紹介した。

コーナー2 ＜生産ー1＞

準備された原料を燃焼させて鉄を作っていくわけであるが、古代の鉄づくりは現代の鉄生産のイメージとは、まるでかけ離れたものであった。そこで、千葉県房総風土記の丘で行なった実験写真を使いながら、炉の製作～燃焼～鉄塊ができるまでを示した。一方、これまで不明な点が多かった炉への送風施設が、柏木遺跡の調査で明らかになったので、その作業風景と全体の操業のようすを柏木遺跡の遺構に重ねてイラストを作成し、当時の鉄づくりのようすを具体的に表現した。実物資料としては、送風管、炉壁等炉本体にかかわる遺物と、炉の操業過程で生じる3種類の鉄滓を展示した。

＜生産ー2＞

古代の製鉄炉には柏木遺跡で発見された竪型炉と、年代的には竪型炉以前からみられ、近世たたらに続いていく箱型炉がある。この二つの炉型を写真パネルで示した。

コーナー3 ＜加工ー1＞

製鉄炉で作られた鉄をさらに製錬する過程が大鍛冶である。柏木遺跡ではこの過程まで行なっていたと考えられる。工房跡の存在を裏づける鍛造剝片、羽口を展示した。

＜加工－2＞

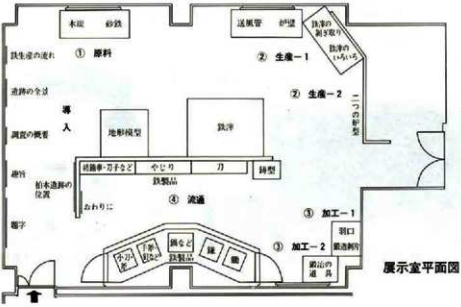
最終的に鉄は製品に加工される。この作業が小鍛冶とよばれる。製品化するためには鋳型や鍛冶道具などが用いられるが、どちらも柏木遺跡からは出土していない。そこで、鋳型の資料として福島県洞山A遺跡出土のものを借用した。また、多賀城跡の五万崎地区では鉄製品を製作していたと思われる工房跡が発見されている（パネルで紹介)。柏木遺跡の性格が多賀城直営の製鉄所ではないかと考えられているだけに、この工房の存在は鉄素材の供給をうけた多賀城内での加工の様子を伺わせる手がかりとなるかもしれない。現代の鍛冶道具も参考資料として展示した。

コーナー4 ＜流通＞

加工を経た鉄がどのような製品に姿を変えたかについては、県内の主な遺跡から出土した鉄製品を借用して展示した。また、絵巻物をパネル仕立てにし、使用方法の理解の助けとした。

③おわりに

生産関係の展示は、その生産過程が重要なウエイトを占めるにもかかわらず、それを具体的に遺物などで示すことが困難である。今回もいきおいパネルの使用が多くなってしまい、加えてレプリカ等が少なかったため、一般の方々にとって、理解が容易ではなかったと思われる。しかし展示の大きなテーマであった古代の鉄生産については、おおよそ把握していただけたかと思う。町の中から鍛冶屋が姿を消し、身近に鉄づくりを感じることのなくなってしまった今日、鉄の存在感が希薄になっていることは否めない。しかし歴史を振り返って見た時、鉄が常に時代を動かす原動力であったことは衆知のとおりである。今回の展示が、改めて鉄の持つ重要性を思い起こし、歴史を見直すきっかけとなれば、所期の目的の一端は果たせるのではないだろうか。



2．木製・鉄製遺物の保存処理

当センターでは、昭和62年４月のオープンを機にＰＥＧ含浸装置（註１）を設置して保存処理事業を本格的に開始した。それまでは、東北歴史資料館に依頼して行なってきた。

事業は〔木製・鉄製遺物の保存処理〕として昭和63年度から国庫補助を受けて実施している。

木製品の保存処理は、これまでに昭和62年７月～63年７月、昭和63年～平成元年７月（取り上げ予定）の２度行なっている。２か年度で対象とした遺物は、山王遺跡第３次調査（昭和55年）・第４次調査（昭和58年）・第５次調査（昭和60年）、市川橋遺跡第４次調査（昭和58年）・第６次調査（昭和61年）、新田遺跡第６次調査（昭和62年）で出土した盤、曲物底板・蓋板、下駄、自在鉤、板草履の芯板、漆器、杭など110点である。

処理の方法は、ポリエチレングリコール（PEG4000）と水分を60℃恒温槽中で置換するＰＥＧ含浸法で行なっている。作業工程は１％EDTA－２Na による漂白、流水洗浄、合成綿・不織布による遺物保護のための梱包、恒温槽中でのＰＥＧへの置換まで約１年を要した。

鉄製品の保存処理の対象とした遺物は、新田遺跡第１次調査（昭和56年）・第３次調査（昭和58年）・第５次調査（昭和61年）・第６次調査（昭和62年）、山王遺跡第１次調査（昭和54年）・第３次調査（昭和55年）、市川橋遺跡第２次調査（昭和57年）・第４次調査（昭和58年）・第５次調査（昭和59年）から出土した刀子・鉄鏃・釘・鉄斧・鉄椀・小柄などの鉄製品89点である。遺物のなかには、サビ脹れの著しいものもあり、Ｘ線透視を行なっている。樹脂含浸の前処理として、エアーブラシ・グラインダー・ニッパー等でサビ取りを行ない、１点ずつカードを付け、不織布・メッシュの袋で破損しているものを保護した。脱塩処理～樹脂含浸までの作業は、東北歴史資料館に委託して行なっている。その後、ソルベントナフサで余分な樹脂を筆でなで取り、自然乾燥させてから接合し補塡した。保存処理の済んだ鉄製品は、注記して湿度の低い特別収蔵庫に保管している。この他、民俗資料（鉄製品）のサビ落しと樹脂含浸を行なっている。

（註１）PEG含浸装置 SUS304 ㈱技術エンジニアリングサービス社製

第１図　PEG含浸装置

第２図　トリクロールエチレンによる木製品表面処理

3．普及活動

(1) 現地説明会の開催

「新田遺跡第８次調査について」　昭和63年９月８日　担当者 石川・石本

「新田遺跡第７次調査について」　昭和63年11月19日　担当者 千葉・相沢

「新田遺跡第９次調査について」　昭和63年12月３日　担当者 石川・石本

(2) 館外における普及活動

期　間	内　容	対　象	依頼機関	担　当
63. 4.20	史跡めぐり(政庁跡、碑)	11市選挙管理委員会	市選挙管理委員会	高　倉
4.28	史跡めぐり(寺跡、政庁跡)	２学年生徒	仙台女子商業高等学校	高　倉
5.18	史跡めぐり(寺跡、政庁跡)	仙台地区公民館連絡協議会	市中央公民館	滝　川
6. 7	史跡案内（政庁跡）	池田市議会議員	市議会事務局	高　倉
6.24	新田遺跡の紹介	(広報紙の取材)	東北石油	千　葉
7. 8	柏木遺跡小展示	一般市民	市大代地区公民館	石川・相沢
～7.31				
8. 8	新田遺跡見学	仙台市文化財めぐり	仙台市教育委員会	千葉・相沢
8.23	児童校外学習（新田遺跡発掘現場）	５・６学年児童	市立八幡小学校	石川・石本
～8.25				
9. 7	芭蕉ゆかりの地めぐり	丸山地区社会学級	丸山地区社会学級	相　沢
9.20	史跡めぐり（政庁跡、碑）	本吉町大谷公民館	市中央公民館	滝　川
10.18	史跡めぐり（碑、政庁跡）	市内中学校社会科担当教諭	多賀城地区教研社会科部会	滝　川
10. 4	政庁跡・新田遺跡見学	下馬姉人会	市秘書広報課	千　葉
11. 2	史跡めぐり（政庁跡、碑）	一般市民	市大代地区公民館	石　本
11. 6	史跡めぐり（政庁跡、碑）	黒石崎成人学級	黒石崎町内会	滝　口
				(文化財係)
11.16	史跡案内（寺跡、政庁跡）	福島県天栄村教委	市教委庶務課	高　倉
11.16	史跡案内（寺跡、政庁跡）	東北財務局	市企画財政課	高　倉
11.25	史跡めぐり（政庁跡、碑）	村田町婦人会	市教委社会教育係	滝　口
元. 3. 1	「柏木遺跡」展の紹介	(ＴＢＣプロムナード)	東北放送ラジオ	相　沢
3. 4	同　上	(朝のメッセージ)	仙台放送	石　川
3. 7	「柏木遺跡」展について	(宮城ホットライン)	ＮＨＫ	相　沢

(3) 講演会などへの協力

期　間	題　目	会の名称	主催団体	講　師
63. 7. 9	郷土史一柏木遺跡の発掘調査成果について	山茶花大学	市大代地区公民館	相　沢
7.10	土器について	ふるさとわらすこ学級	市中央公民館	千　葉
7.28	土器づくり	同　上	同　上	石　本
10.14	多賀城周辺の調査成果について	第14回宮城県文化財保護地区指導員並びに市町村文化財担当者等研修講座	宮城県教育委員会	高　倉
10.18	石巻市水沼窯跡の調査成果について	同　上	同　上	千　葉
11.19	「おくのほそ道」と多賀城	丸山地区社会学級研修	丸山地区社会学級	滝　川
11.26	新田遺跡寿福寺地区発見の中世遺構	東北中世史研究会11月例会	東北中世史研究会	千　葉
12.10	新田遺跡第７・８次調査	昭和63年度宮城県内発掘調査成果発表会	宮城県教育委員会	相　沢
12.10	新田遺跡第９次調査	同　上	同　上	石　本
元. 3. 4	多賀城市内の歴史について	ＰＴＡ研修会	多賀城中学校文化部	高　倉
3. 8	柏木遺跡の調査成果	「日本人の技術と生活に関する歴史的研究」(昭和63年度国立歴史民俗博物館特別研究)	国立歴史民俗博物館	高　倉
～3.10				

(4) 資料の貸し出し

依頼機関	目的	貸出期間	資料名
愛知県三好町立歴史民俗資料館	「文様陶器の流れ」	63. 5.23 ～7.25	新田遺跡出土緑釉陶刻花文陶片 1
朝日新聞大阪本社	"古代の美とロマンをもとめて"	63. 7.12 ～	市川橋遺跡出土人面墨書土器 1
全国埋蔵文化財法人連絡協議会	「日本列島発掘展」	貸出中	
全国公立埋蔵文化財センター			
日本第四紀学会	(仙台大会)	63. 8.18 ～8.22	志引遺跡及び柏木遺跡出土旧石器
石越町教育委員会	石越町文化財ビデオ作成	63. 9.22	旧石器・縄文・古墳各時代ジオラマ縄文時代展示資料（展示室内で撮影）
利府町立利府第二小学校	6年生社会課単元「武士の世の中」授業資料	63. 9.22 ～10. 8	「中世の多賀城」（展示室内ビデオ） 新田遺跡関係スライド・写真
五島美術館	「日本陶磁絵巻―やきものに刻まれた絵画」	63. 9.25 ～12.10	市川橋遺跡出土人面墨書土器 1
愛知県陶磁資料館			
仙台市博物館	「7世紀の仙台平野」	元. 2. 1 ～3.20	大代横穴古墳群出土頭椎大刀 1 稲荷殿古墳出土横瓶 1・銀環 2

(5) 研究発表・執筆等

石川俊英・相沢清利「宮城県柏木遺跡」『月刊文化財』306号
相沢清利「古代製鉄所跡"柏木遺跡"発見」県政だより1月号

(6) 共催事業

第15回古代城柵官衙遺跡検討会
期日：平成元年2月11・12日
会場：多賀城市文化センター 小ホール
内容：昭和63年度発掘調査報告・特集「多賀城周辺の古代遺跡」
＜個別発表＞
伊治城跡、名生館遺跡、東山遺跡、多賀城跡、三十三間堂遺跡、関和久上町遺跡、秋田城跡、胆沢城跡、郡山遺跡、八森遺跡
＜特集「多賀城周辺の古代遺跡」＞
館前・大臣宮遺跡(高倉敏明)　多賀城南辺の周辺(白鳥良一)　市川橋遺跡西半部(鈴木真一郎)
新田・山王遺跡(千葉孝弥)　市川橋遺跡水入地区(森　貢蒙)　高平遺跡(高野芳宏)
郷楽遺跡(庄子　敦)　柏木遺跡(相沢清利)　多賀城周辺遺跡の性格(高倉敏明)

Ⅲ 事務報告

(1) 展示室入館者数（カッコ内は昭和62年度）

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	年計
一般	280	181	395	310 (347)	245 (589)	341 (409)	187 (578)	250 (402)	131 (77)	145 (303)	247 (105)	248 (278)	2,940 (3,088)
高校	269	24	2	3 (7)	11 (7)	2 (2)	5 (5)	0 (28)	1 (1)	3 (2)	49 (0)	1 (46)	370 (98)
小中	257	77	28	61 (159)	98 (272)	216 (81)	38 (24)	64 (86)	45 (22)	55 (69)	69 (44)	69 (88)	1,077 (845)
招待券	0	0	0	0 (101)	0 (12)	0 (5)	0 (0)	0 (1)	0 (1)	2 (3)	0 (1)	1 (2)	3 (131)
免除	91	136	50	66 (64)	41 (68)	0 (290)	119 (423)	184 (0)	0 (0)	42 (0)	0 (28)	151 (0)	880 (873)
その他	227	167	118	145 (84)	71 (124)	47 (313)	174 (287)	283 (359)	52 (75)	32 (122)	329 (132)	88 (109)	1,733 (1,605)
合計	1,104	585	593	585 (762)	466 (1,072)	606 (1,100)	523 (1,318)	781 (880)	229 (176)	279 (499)	694 (310)	558 (523)	7,003 (6,640)

(2) 昭和63年度予算

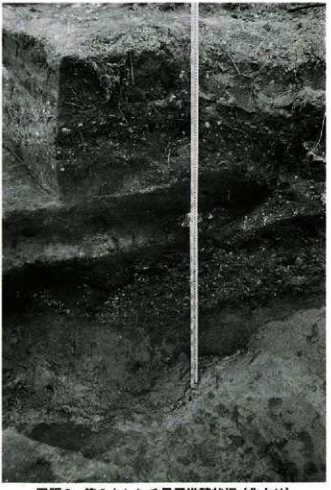
単位：千円

埋蔵文化財緊急調査に要する経費	史跡のまち発掘調査に要する経費	普及・啓蒙に要する経費	遺物の保存処理に要する経費	発掘調査受託事業に要する経費	総額
6,000	2,963	5,499	500	5,000	19,962

橋本囲貝塚

図版1　横穴古墳検出状況（南より）

図版2　第2トレンチ貝層検出状況（南より）

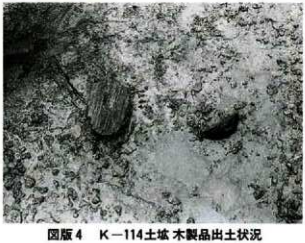


図版3　第3トレンチ貝層堆積状況（北より）

図版１　調査区東半部全景（北より）

図版２　Ｅ－２井戸跡板碑出土状況

図版３　Ｅ－２井戸跡

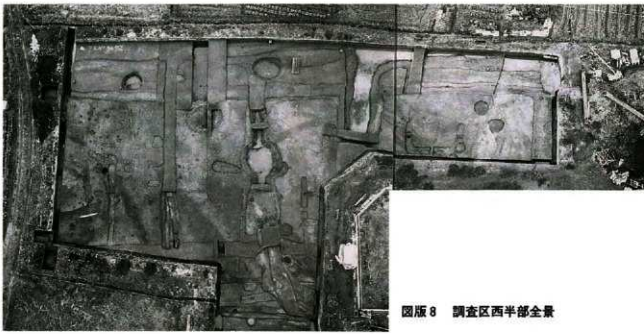


図版４　Ｋ－114土坑 木製品出土状況

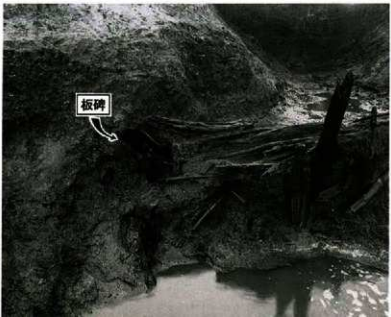
図版５　Ｄ－82溝跡 柄杓出土状況

図版6　調査区西半部航空写真（北より）

図版7　同　左（南より）

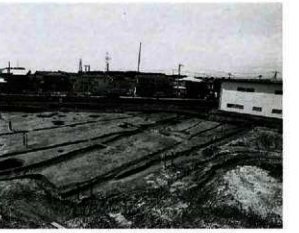


図版8　調査区西半部全景



図版9　D－100溝跡とK－121土坑の連絡部に設けられた堰

図版１　Ｂ－１建物跡（北より）



図版２　調査区南西部（北東より）

図版３　調査区南東部（北より）

図版４　Ｄ－２溝跡（南より）

図版５　Ｅ－２井戸跡（北より）

図版６　Ｄ－２溝跡土層堆積状況

図版1
Ⅰ区北半部(南西より)

図版2
Ⅰ区北半部
竪穴住居跡(西より)

図版3
Ⅱ区全景(南より)

図版4　SX01祭祀遺構（西より）

図版5　SX01祭祀遺構（東より）

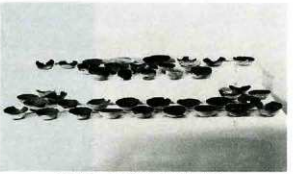
図版6　SX01祭祀遺構（北西より）

図版7　SX01祭祀遺構（西より）

図版8　SX02祭祀遺構（南より）

図版9　SX02祭祀遺構（西より）

図版10　SX01出土遺物（各器種）



図版11　SX01出土遺物（杯）

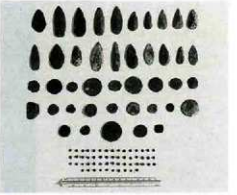
図版12　SX01出土遺物（甕・甑）

図版13　SX01出土遺物（甕）

図版14　SX01出土遺物（壺等）

図版15　SX01出土遺物（石製模造品等）

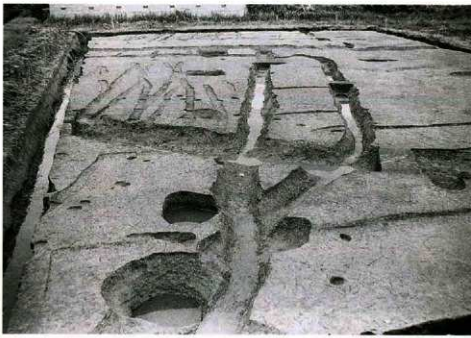
図版16　SX02出土遺物



図版17　SX02出土遺物（石製模造品）

山王遺跡（第７次）

図版１
調査区北半部（東より）



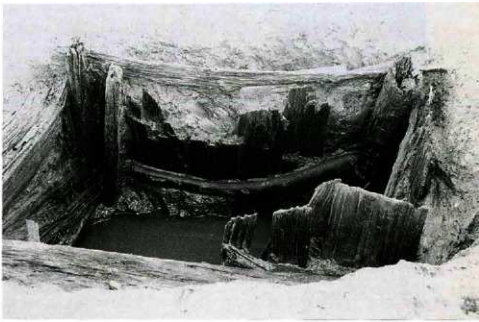
図版２
調査区北半部（西より）

図版３
調査区北東部（南より）

図版１　道路跡側溝重複状況（東より）

図版２　道路跡側溝完掘状況（東より）

図版3
E－1 井戸跡検出状況（東より）



図版4
E－1 井戸跡　井戸側（東より）

図版5
第Ⅱ層下杭列検出状況（南より）

多賀城市文化財調査報告書刊行目録

第１集　館前遺跡―昭和54年度発掘調査報告―（昭和55年３月）
第２集　山王・高崎遺跡発掘調査概報（昭和56年３月）
第３集　高崎・市川橋遺跡調査報告書―昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年３月）
第４集　市川橋遺跡調査報告書―昭和57年発掘調査報告書―（昭和58年３月）
第５集　市川橋遺跡調査報告書―昭和58年発掘調査報告書―（昭和59年３月）
第６集　志引遺跡発掘調査報告書（昭和59年３月）
第７集　大代横穴古墳群発掘調査報告書（昭和60年３月）
第８集　市川橋遺跡―昭和59年度発掘調査報告書―（昭和60年３月）
第９集　山王遺跡―昭和60年度発掘調査報告書Ⅰ―（昭和61年３月）
第10集　山王遺跡―昭和60年度発掘調査報告書Ⅱ―（昭和61年３月）
第11集　高崎遺跡―都市計画街路高崎大代線外１線建設工事関連発掘調査報告書Ⅰ―（昭和61年３月）
第12集　高崎遺跡―都市計画街路高崎大代線外１線建設工事関連発掘調査報告書Ⅱ―（昭和62年３月）
第13集　市川橋遺跡―昭和61年度発掘調査報告書―（昭和62年３月）
第14集　年報１（昭和62年３月）
第15集　昭和62年度発掘調査報告書（昭和63年３月）
第16集　年報２（昭和63年３月）
第17集　柏木遺跡調査報告書（平成元年３月）
第18集　新田遺跡（平成元年３月）
第19集　高崎遺跡調査報告書―中央公園関連調査報告―（平成元年３月）
第20集　年報３（平成元年３月）

多賀城市文化財調査報告書第20集

年　報　３

平成元年３月31日　発行

編集
発行　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番１号
電話（022）３６８－０１３１～４

印刷　遠　藤　印　刷　所
多賀城市八幡三丁目４番７号
電話（022）３６２－３９７３